



# 仙台市科学館 蒲生調査レポート 速報版




No.136

〒981-0903 仙台市青葉区台原森林公園4番1号  
仙台市科学館 事業係  
TEL:022-276-2201 FAX:022-276-2204  
<http://www.kagakukan.sendai-c.ed.jp/>

2017.1.22

## 多毛類（ゴカイの仲間）の分布




### ■ 潟湖奥に生息する多毛類

今回の調査では多毛類（ゴカイの仲間）の潟湖における分布を観察した。古い資料であるが1980年に発行された栗原康著「干潟は生きている」によると、以前の蒲生干潟ではFig. 1の  にはイトミミズが分布し、 には多毛類やエビが分布していた。多毛類は干潟の広い範囲に分布していたが  は多毛類が分布する最奥部にあたる。イトミミズは多毛類と比較して底質の粒子が細かく有機物が多い環境に生息する。そのような環境は酸素が不足した還元的な環境になりやすい。還元的な環境とは硫化水素臭がす



(Fig.1 蒲生干潟全景)

ような環境であり、酸素が不足しているためそこに生息できる生物は少ない。

今回の調査では、導流堤付近から干潟奥部にかけてゴカイの仲間は広く生息していた。Fig. 2はFig. 1の  の部分であるが、多毛類の生息穴が多数見られる。また鳥類の足跡も見られ多毛類を餌として利用していることがうかがえる。Fig. 3は同所で観察した多毛類の仲間である。  の地点は以前の蒲生干潟で多毛類が分布する最奥部であり、現在もほぼ同じ所まで多毛類が生息することが確認できた。多毛類が生息しないような還元的な環境は拡大していないと思われる。  の部分には今回渡ることが出来なかったため、今後の調査で確認したい。

### ■ 養魚池が失われる影響

Fig. 4は潟湖奥部の通路で、右側が潟湖である。左側は先月までは養魚池が存在したが、堤防工事のため現在池は失われている。蒲生干潟は1960年代後半に仙台港の工事のため七北田川の河道が埋め立てられてきたものであるが、蒲生でのコイや金魚の養殖はそれ以前から行われていた。「干潟は生きている」によると、季節による変化は見られるが、春から秋にかけては1日に約7000トンの淡水が干潟に供給されていた。これが失われることで干潟の環境がどのように変化するか、さらにその変化により生物はどのような影響を受けるのか、今後注目すべき課題である。

(Fig.4 堤防工事の現場)



(Fig.2 ゴカイの生息穴)



(Fig.3 ゴカイの仲間)

